

4-7		主題	理学療法士の奮闘記	
特養の常勤PT		副題	— リハビリ的視点の啓蒙活動 と 他職種との連携 —	
研究期間	36ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 千住桜花苑	
発表者：寺田 恵子（てらだ けいこ）		アドバイザー：渡邊 秀雄（わたなべ ひでお）		
共同研究者：リハビリ委員（日向香織・菅原美智子・肉丸健夫）				
電話	03-5244-6881	メール	senju_oukaen@seifuukai.or.jp	
FAX	03-5244-6880	URL	http://www.seifuukai.or.jp/	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	社会福祉法人聖風会千住桜花苑は平成19年6月に開設した、新型特養です。定員100床・短期20床の12ユニット計120床です。その他に、デイサービスセンター・ケアマネジメントセンターを併設している高齢者総合福祉施設です。地域や保育園児の訪問も多く、地域との交流が広がっている施設です。
------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

《研究前の状況と課題》	《研究の目標と期待する成果》
<p>特別養護老人ホーム千住桜花苑（以下、桜花苑）の理学療法士（以下PT）として2008年に入職。病院ではリハビリ科など、1つの組織となっていて、同職種の上司がいる。しかし特養でのPTは1人職種となる事が多く、自ら、他職種と連携をし、利用者のリハビリ実施・調整なども行わなくてはならない。</p> <p>右も左もわからない状況で入職し、1人職種でできる事も限りある中、特養という生活の場で、ご利用者へのリハビリをどのような形で行っていけば良いのかを課題とした。</p>	<p>「介護職や他職種との連携」をとりながら、桜花苑でリハビリの体制を構築し、1人職種でも、100名のご利用者へ、効果的・効率的にリハビリが提供できる。また、リハビリ的視点が1人ひとりに根付き、介護職員のケアの質向上を期待する。</p>

《具体的な取り組みの内容》

★リハビリ的視点の啓蒙活動★

- ①リハビリ研修の実施（介助方法、体位交換等）
- ②リハビリ委員会にて集団体操の実施
- ③リハビリ通信発行（リハビリ的視点からケアが行えるよう職員に向けて啓蒙活動）
- ④個別トランス指導（移乗困難な利用者の移乗を、ビデオ撮影にて検討）
- ⑤歩こう倶楽部の実施（目標に向かっての自主的な活動）

★連携作り★

介護職との①リハビリ委員会を発足し、現場の声を聞きながらリハビリの体制作り。

②利用者の24時間の生活動作を聞き、一番の課題を知る。また介護職・利用者とのコミュニケーションを図り、状況把握に努めた。

③介護職の1日の業務の流れをつかみ、協力してもらえる時間帯を把握した。またPTからも、相談の可能な時間帯を伝えた。

④個別リハビリの予定表に基づき、介護職の協力協力を要請。

医師・看護師との①リハビリ対象者の相談ができる体制作り。

家族との①ケアカンファレンスに参加。リハビリ状況を説明し、家族の理解・協力を得る。

法人機能訓練指導員との①法人内の、機能訓練指導員との連絡会を実施。

《取り組みの結果と評価》

介護職：体位交換や除圧方法、自立を促した立位方法などリハビリ的視点でのケアが、生活の中で行えるようになってきた。

医師・看護師：身体機能の変化時、相談が行え、安心してリハビリの実施が行えた。

他職種：他職種に報告・相談を行う事で精神的な安心感が得られるようになった。

利用者：活動が日々の楽しみとなっている利用者が増えた。

《まとめ》

入職して間もない頃は、1人では何も行えないと痛感し、他職種と連携する事から基盤をつくり、安心感も得られた。また、利用者に1番近い介護職への啓蒙活動により、リハビリ的視点でのケアが行えるようになってきた。次の課題は、啓蒙後の現場評価である。しかし最大の目標はご利用者1人ひとりの「尊厳の保持」であり、それが成果として見えにくい事も忘れないようにしたい。

《参考文献》

1. 厚生労働省 hp『2015年の高齢者介護』
閲覧日2011, 6, 19
2. 日高正巳（代表）：特別養護老人ホーム就業を目的とした理学療法士の学習課題 神戸大学医学部保健学科紀要 第16巻 2000
3. 日高正巳：特別養護老人ホームにおける理学療法士の役割—他職種からの要望調査結果より

《提案と発信》

施設でのリハビリ機能の整理が必要と言われている¹⁾。どこにも答えはのっていない現状で、1人の理想だけで動く現場とズレが生じる。しかし1人職種でも施設内にて連携を図る事で、現場からPTへの需要も少しずつみえてきた。しかしその大前提には、施設・他職種の双方からの理解・協力が不可欠である。

【メモ欄】